様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １３ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０４０８５

研究課題名（和文）在日朝鮮人における＜民族＞と＜祖国＞の意味に関する社会学的研究

研究課題名（英文）Sociological Reaseach on <Ethnicity> and <Homeland>for Zainicih Koreans

研究代表者
山本　かほり（Yamamoto, Kaori）

愛知県立大学・教育福祉学部・教授

研究者番号：３０２９５５７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は朝鮮学校に通う在日朝鮮人の学生たちへのインタビューと参与観察を中心に，かれらにとっての＜祖国＞＝朝鮮民主主義人民共和国（朝鮮）の意味を考察した。日本社会で徹底して「他者化」された朝鮮に対する朝鮮学校学生たちの愛着およびそこを＜祖国＞するのはなぜなのか？ということを中心として分析した。6回，かれらの朝鮮への＜祖国訪問＞（修学旅行）に同行し，かれらの2週間を観察した。朝鮮でのかれらの受け入れられ方と日本社会におけるかれらへの処遇がかれらの朝鮮への愛着をうむと考察をおこなっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
在日朝鮮人研究はこれまで国内外を含めて，膨大な研究成果がある。しかし，朝鮮学校やそこに関係する人に焦点をあて，かつ参与観察やフィールドワークをもとに発表された研究はSonia Ryang　”North Koreans in Japan"，宋基燦『語られないものとしての朝鮮学校』くらいしかない。本研究は，これらの研究を参照しつつも，特に，朝鮮学校に通う高校生たちの＜祖国訪問＞への同行調査，その前後の参与観察やインタビュー調査を通じて，かれらが内面化している「祖国」の意味を明らかにしようとしたことに学術的かつ社会的意味がある。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to analyze the meaning of <Homeland> for Zainichi Korean Students of Choson School or Ethnic Korean school in Japan. The DPRK is considered as <Homeland> for them while the DPRK has been demonaized in Japan. I conducted my researches through participant observations-going to the DPRK with the students(their school trip) and interviews to them. They considered the DPRK their homeland as they were warmly welcomed and seen as their folks there while Japan still discriminate against them.

研究分野：社会学

キーワード：在日朝鮮人　朝鮮学校　民族教育　祖国　民族　朝鮮民主主義人民共和国

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は，申請者自身の「朝鮮学校における『民族』の形成・獲得・変容のメカニズム」（基盤Ｃ2011～2014 年，以下「前研究」）の継続研究としての位置づけがある。申請者は愛知朝鮮中高級学校（愛知中高）での参与観察およびインタビューにより，個人の人生において，朝鮮学校経験がもつ意義について考察を行った。いまだ，植民地主義的な日本社会で，朝鮮学校が在日朝鮮人にとって「安全な家」（ロサルド，1998）であり，緩やかな民族の共同性と連帯の核となる場であることを明らかにしてきた。ところで，朝鮮学校は創立初期の頃から，南北分断の朝鮮半島のうち，北側の朝鮮民主主義人民共和国（朝鮮）を正当な国家としてみなし，密接な関係を持ってきた。この関係には歴史的経緯があるが，この立場ゆえに，朝鮮学校は，たとえば高校無償化制度からの排除等，公権力からの差別，「在特会」からの襲撃等，官民一体となった排斥を受けている。日本の政治的立場南の韓国を唯一正統な国家としてみなしている。したがって，朝鮮学校関係者は，自ら朝鮮との関係を「脱色」して朝鮮学校や自分のナショナルアイデンティティを他者に語ることを「強制」されているのが現実である。そうしないと，日本社会に「認められない」という複雑な状況におかれているのである。しかし，申請者は参与観察を通じて，朝鮮学校関係者と朝鮮の関係は物理的にも心理的に非常に近いことを発見してきた（拙稿，2013，2014，2015）。なぜ，朝鮮学校関係者が，愛着をもって，朝鮮を「ウリナラ（私たちの国）」と呼び，＜祖国＞として受け止めているか？朝鮮学校関係者にとっての＜祖国＞とは何か？この問いを解明するために，これまで，高３生の朝鮮への修学旅行（「祖国訪問」）に３回の同行調査を実施し，かれらの朝鮮での様子を観察した。そして，かれらが朝鮮を＜祖国＞として内面化するのは，日本での在日朝鮮人に対する無理解と差別，排除の現実との「対抗言説」としてあると分析してきた（移民政策学会・口頭発表，2014＆2015）。その継続課題としての位置づけにある。

２．研究の目的

これまでの研究で，朝鮮（＝＜祖国＞）で，日本での在日朝鮮人の処遇の厳しさとは対称的に，朝鮮で生徒たちが温かく迎えられ，日本では報道されない現地の人々との交流を通じて，朝鮮を＜祖国＞として内面化していくのではないだろうか？さらに，日本の状況の「対抗」としての＜祖国＞という側面だけではなく，朝鮮学校関係者個々人の内的な営みによって，朝鮮を＜祖国＞としていくのではないだろうか？本研究の第一の課題は，その過程を明らかにし，その意味づけを分析することにあった。そのために，本研究では，前研究では着手できなかった朝鮮側の受け入れ側のあり方について，さらなる参与観察を行いたい。つまり，現地朝鮮での経験をどう個々人が内面化するのかを分析することを目指す。そのために，朝鮮の受け入れ機関と連携をとりつつ，「祖国訪問」同行調査を継続し，朝鮮の受け入れ側さらには愛知朝高と姉妹関係を結んでいる平壌の学校の生徒へもできる限りの調査を行い，朝鮮学校関係者にとっての＜祖国＞についての包括的理解に挑むことを目標とした。

朝鮮学校関係者たちが現代日本社会の状況，また，朝鮮半島をとりまく現在の国際状況のなかで，自らの知的活動を通じて民族的なるものや国家（祖国）観を形成し，内面化していくプロセスを明らかにしたいと考えている。かれらが＜祖国＞とする朝鮮との関係性，朝鮮を＜祖国＞とすることの意味も，大胆に積極的にふみこんで，内在的に理解をすべく考察をすすめたい。合わせて，在日朝鮮人たちがおかれた複雑な状況を描き出すために，多くの朝鮮学校関係者のルーツである韓国に対する意識も分析しようとした。

３．研究の方法

（１）愛知朝鮮中高級学校（愛知中高）での参与観察の継続：前研究に引き続き週一回愛知中

高での参与観察を行う。エスノグラフィーを目指したい。朝鮮学校の教科書も分析し，その中で構築される＜民族＞＜国家＞などを分析する。（２）愛知中高卒業生へのインタビュー：①朝高卒業後 15 年以内の若い層:2002 年の「拉致問題」発覚以降の「北朝鮮バッシング」の中で学校生活を送ってきた世代だからだ。朝鮮学校経験，訪朝経験，現在の民族/祖国観などを解明する。②朝鮮大学校生（朝大）：朝大進学は朝高にとって「望ましい」進路であり，将来，総聯社会および朝鮮学校を担う人材育成が目指される。これまでの調査で，かれらの祖国観や民族観が決して一枚岩的な愛国主義でなく，かれらの個人の再解釈と再想像の過程が読み取れた。さらにこの点を考察したい。③日本の大学進学者（日大進学者）：朝高から日大進学するということは，朝高的価値観からの「距離」を示す。かれら自身が日大進学以降，日大でどのような生活世界を築き，さらに＜民族＞＜祖国＞をどう再解釈していくのかを考察する。（３）朝鮮への「祖国訪問」同行：前研究期間に朝鮮側と関係形成をしたので，連携して，朝高の「祖国訪問」同行調査を継続し，かれらが朝鮮を祖国として内面化する過程を描写，分析する。

４．研究成果

本研究は，申請者自身の「朝鮮学校における『民族』の形成・獲得・変容のメカニズム」 (基盤 C 2011 年~2014 年)および「在日朝鮮人における<民族>と<祖国>の意味に関する 社会学的研究」(基盤 C 2016 年~2019 年，以下二つをあわせて「前研究」とする)の継続課 題である。申請者は，前研究期間中，愛知朝鮮中高級学校を主たるフィールドとして，参与 観察および朝鮮学校関係者へのインタビュー調査を行ってきた。そして，個人の人生におけ る朝鮮学校経験がもつ意義を考察し，朝鮮学校は，朝鮮人であることを否定されがちな日本 社会において，在日朝鮮人が「当たり前に朝鮮人としていられる」空間であり，緩やかな民 族の共同性と連帯の核となる場であることを明らかにしてきた。(山本かほり，2014 「朝鮮学校で学ぶということ」『移民政策研究』6 号)

また，朝鮮半島が南北分断されている現実の中で，北側の朝鮮民主主義人民共和国(朝 鮮)を正当な国家とする朝鮮学校の政治的立場と関連し，朝鮮学校で語られる<祖国>の内 実を明らかにし，また，高 3 の修学旅行(平壌)への同行調査を行い，朝高生たちが経験し 体感する<祖国>とはどのようなものであるかを描いてきた。現在の日本社会において 「悪」でしかない「北朝鮮」を<祖国>とし，愛着を示す朝高生たちをエスノグラフィック に描き，日本国内および韓国で発表を行ってきた。(山本かほり，2016「排外主義の中の朝鮮学校」『移民政策研究』8 号)

さらに，日本社会学会，移民政策学会など日本国内の学会のほか，NZ での国際高麗学会，ソウル大学におけるシンポジウム，ソウル東国大学校における特別講義などを通じて，国内外に研究成果を発表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 山本かほり	４．巻 67
２．論文標題 平壌での青春ー愛知朝鮮高校＜祖国訪問＞同行記　1	５．発行年 2019年
３．雑誌名 愛知県立大学教育福祉学部論集	６．最初と最後の頁 41　50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本かほり	４．巻 9
２．論文標題 「排外主義の中の朝鮮学校―ヘイトスピーチを生み出すものを考える」	５．発行年 2017年
３．雑誌名 移民政策研究	６．最初と最後の頁 38-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山本かほり	４．巻 9
２．論文標題 排外主義の中の朝鮮学校ーヘイト・スピーチを生み出すものを考える	５．発行年 2017年
３．雑誌名 移民政策研究	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） -	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　6件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 山本　かほり
２．発表標題 The Meanings of Homeland for Koren School Students in Japan
３．学会等名 延世大学　原州キャンパス　国際学部10周年記念シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 山本　かほり
２．発表標題 中部地区における朝鮮学校の現状と課題
３．学会等名 在日同胞朝鮮学校の民族教育（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 山本かほり
２．発表標題 朝鮮学校における＜祖国訪問＞の意味
３．学会等名 日本社会学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 山本かほり
２．発表標題 朝鮮学校における＜祖国＞の意味
３．学会等名 国際高麗学会（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 山本かほり
２．発表標題 朝鮮学校における＜祖国＞の意味
３．学会等名 東国大学校統一人文学研究所　グローバルセミナー（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 山本かほり
２．発表標題 排外主義の中の朝鮮学校
３．学会等名 移民政策学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 山本かほり
２．発表標題 朝鮮学校生にとっての祖国の意味
３．学会等名 在日コリアンと祖国（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 山本かほり
２．発表標題 私たちの北側の国への修学旅行
３．学会等名 Global Korean Studies and Anthropology of Migration and Diaspora（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Kaori Yamamoto
２．発表標題 The meanings of "Homeland" for Zainich Korean Students
３．学会等名 Global Migration of North Korea（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計1件

１．著者名 山本　かほり（共著）	４．発行年 2018年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 292
３．書名 移民政策のフロンティア	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考